



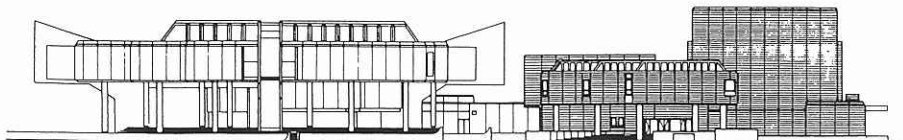
ラファエル・コラン 日だまり（くつろぎ）（佐賀県立美術館蔵）
「近代洋画の開拓者たち—アカデミズムの潮流」展出品

佐賀県立博物館・美術館報

SAGA PREFECTURAL MUSEUM · SAGA PREFECTURAL ARTMUSEUM

26 December 2003

No. 131



企画展レポート

佐賀県立美術館20周年記念企画展

近代洋画の開拓者たち—アカデミズムの潮流—

佐賀県立美術館は昭和58（1983）年10月に開館し、本年、20周年を迎えることとなりました。これまで当館は佐賀県の特徴ある美術の紹介、顕彰につとめてきましたが、とりわけ佐賀県出身の画家たちがめざましい活躍を見せた近代洋画について、百武兼行、久米桂一郎、岡田三郎助らを中心に質、量ともに充実したコレクションを誇ります。開館展では「近代・九州の洋画家たち展」、さらに10周年では「岡田三郎助展」といった、いずれも本県の近代洋画に焦点を当てた展覧会を開催し、好評を博してきました。

本展覧会「近代洋画の開拓者たち—アカデミズムの潮流—」は、20周年の節目を記念するものであり、黒田清輝、久米桂一郎による外光表現移入から東京美術学校西洋画科の創設、さらに明治40（1907）年にはじまる官設展覧会「文部省美術展覧会（文展）」により形成された、日本近代洋画の主流ともいえるべき「アカデミズム」を取り上げ、その流れを油彩画84点、水彩画2点の計86点の展示を通して紹介したものです。

展示作品のうち30点が佐賀県内で初公開であり、さらに佐賀県出身の洋画の先覚者、百武兼行の新出作品も出品されました。

展示と構成

1. 近代洋画の新風—黒田清輝、久米桂一郎の帰朝—

明治20年代後半、日本の洋画における大きな転換点のひとつは、黒田清輝と久米桂一郎の帰朝でした。二人はフランスのアカデミー・コラロッシュで教鞭をとっていた「外光派アカデミズム」の画家とも呼ぶべきラファエル・コランに洋画を学び、明治26（1893）年に帰国します。彼らがフランスからもたらした明るく色彩の清新な画風「外光表現」は、国内の洋画壇に新時代をひらくきっかけとなりました。

2. 日本的アカデミズムの芽生え

—東京美術学校・西洋画科の創設—

黒田清輝と久米桂一郎は明治29（1896）年、外光表現を主とする洋画団体「白馬会」を結成、洋画の新風

として多くの画家に支持されました。当時のジャーナリズムはその色彩と思潮の違いから、旧来の明治美術会を「旧派」「脂派」、そして白馬会を「新派」「紫派」と呼ぶようになります。

そして同年、東京美術学校について西洋画科が新設され、黒田がその授業を委嘱されることとなります。そして同時に久米桂一郎、藤島武二、長原孝太郎、岡田三郎助といった白馬会に参加する画家たちも揃って教官に赴任しました。

初期の美術西洋画科からは、中沢弘光や小林萬吾、和田三造といった俊才が巣立ち、後に官設展覧会を舞台に活躍をはたします。さらに浪漫主義の鬼才・青木繁もまた、西洋画科で学んだひとりでした。

3. 官設展覧会とアカデミズムの成熟—文展と帝展—

3-1 文展（文部省美術展覧会）の時代

3-2 帝展（帝国美術院美術展覧会）の時代

明治40（1907）年、国内初の官設美術展覧会「文部省美術展覧会（文展）」が開催されました。これはフランスにおける「サロン」に倣ったもので、各派が対立・混乱状態にあった美術界に統一的な発表の場を提供するものでもありました。

旧派、新派それぞれの多くの画家たちが文展に出品しましたが、文展を通して互いに相互に影響を及ぼしあうようになり、あくまで写実を基本とした、明るく穏やかな色調の画風が文展全体の傾向になっていきました。ここに日本洋画の主流、典型ともいえるべき「アカデミズム」がかたちづくられたといえます。文展は美術の清華をひろく紹介し、大衆の美術文化への関心をいっそう高めました。

続いて大正8（1919）年に美術の最高諮問機関である「帝国美術院」が創設され、それにとまない官展も「帝国美術院展覧会」（帝展）に改称されました。帝展時代になると、後期印象派や野獣派等、ヨーロッパの新しい美術運動に刺激された、より主観的で自由な画風をもとめる画家たちが増えていきました。

4. 地方におけるアカデミズムの広がり

—佐賀美術協会の誕生—

大正2(1913)年、美校の教官であった久米桂一郎と岡田三郎助をはじめとし、在京の佐賀県出身の美術家たちが集まり「佐賀美術協会」の設立の構想が立てられました。そして翌大正3年、佐賀市の旧県会議事堂にて佐賀ではじめての総合的な美術展覧会「佐賀美術協会展(美協展)」が開催されました。美協展は「佐賀の文展、帝展」と呼ばれ人々に親しまれ、現在に至るまで佐賀県の実術界の母体としてあり続けています。今回は小代為重、山口亮一、北島浅一、御厨純一、武藤辰平等、その草創期の画家たちの館蔵品を中心に紹介しました。

(学芸課 野中耕介)



黒田 清輝〈赤き衣を着たる女〉

明治45(1912)

鹿児島県歴史資料センター黎明館蔵



久米桂一郎〈残曛下絵〉

明治31(1898)佐賀県立美術館蔵



岡田三郎助〈水浴の前〉

大正5(1916)

石橋財団石橋美術館蔵



鹿子木孟郎〈新夫人〉

明治42(1909)京都市美術館蔵



小林 萬吾〈渡舟〉

明治42(1909)香川県文化会館蔵



前田 寛治〈横臥裸婦〉

昭和2(1927)鳥取県教育委員会蔵

レポート

常設特別展「美術館はふしぎの国」

夏休み期間中の子供たちを対象にした展覧会は、平成11年の「美術館は動物園」を皮切りに、今年で5回目を迎えた。「みる・あそぶ・しらべる・つくる」をテーマに開催する「夏休みこどもミュージアム」のメイン展覧会として、かなり定着してきたようだ。今年の夏休みも、多くの子供たちが美術館に足を運んでくれた。

平成15年度美術館常設特別展「美術館はふしぎの国」は、7月11日（金）から8月31日（日）まで、45日間開催した。美術館の展覧会としているものの、展示内容は、考古資料や近世絵画、工芸品など博物館資料も多く使い、博物館・美術館あわせた展覧会といった感じが強くなった。今回の展覧会での反省点をふまえて、「美術館はふしぎの国」をふりかえってみよう。

展示は、人間の想像力がつくりだしたふしぎの数々を「Ⅰ ようこそ！ふしぎの国へ」「Ⅱ 神さま・仏さまのかたち」「Ⅲ ふしぎのひと・いきものたち」の3部構成で紹介することにした。

夢の中ででてる風景(くるくる変わる景色)、昔の人々があこがれ想像した世界、宇宙や未来を思わせるふしぎな空間など人間が創りだした仮想の世界を「Ⅰ ようこそ！ふしぎの国へ」で、やさしい姿やちょっと恐そうな姿、少しユーモラスな姿の神や仏を「Ⅱ 神さま・仏さまのかたち」で、ちょっと変わった人や生き物を「Ⅲ ふしぎのひと・いきものたち」で、それぞれを表す“もの”を展示した。

子供たちが興味を持つだろうか、子供たちが展覧会を見てふしぎと感じてくれるだろうか、一緒に観覧する保護者の方も楽しんでくれるだろうか。そんな不安を持ちながら展覧会はスタートした。会場の様子を知るために、できるだけ美術館の2・3号展示室に向かうように心がけた。子供向けのキャプションを読みながらワークシートの問題を解いている、そんな姿を見ると何故かホッとする。子供たちにとっては、ワークシートの問題を解くことが一番楽しいようだ。保護者にいろいろな質問もしていた。時には子供たちより保護者の方が熱心な姿も見受けられた。

ワークシートは、当初2枚準備した。作品に関する

3択問題と作品の一部から作品名を当てる問題である。例えば3択問題は「『ぞう』がかかっている『え』は、2号でんじつつのなかにかくつある？」「八兵衛浮立面（はちべえふりゅうめん）」、あたまたこぶをつくって、いたそうなかおをしているのはだれ？」などだが、さがすために2号展示室の中を行ったり来たりしたり、浮立面の前でジーンとながめたり、観覧時間は保護者の方より子供たちが長かったようだ。小学生を対象にした場合、答えを書かせるより、3択問題にした方が、低学年から高学年まで利用しやすいこともわかり、新たに作成した3枚目のワークシートも3択問題にした。



固城五廣大タルの前でワークシート

ワークショップは、「ふしぎを描こう」と題し、展覧会の作品を選んで描いてもらったり、子供たち自身がふしぎと考えていることなど自由に描いてもらった。7月24日（木）・25日（金）と8月19日（水）・20日（木）の4日間で190人が参加した。小学生が大半だが、今回は幼稚園児以下の参加者が50人を越え全体の1/4を占めた。このことは幼稚園児の絵を描くことへの興味が高いことを改めて思い知らされた。これは、絵の題材を、展示品を見ながら描くということではなく、自由な発想で好きなものを描いてよいとしたことが理由に挙げられるだろう。中学生の参加が少なかったことと合わせて、今後のワークショップのあり方を検討していく、良い材料になった。



ワークショップ「ふしぎを描こう」

今回の展示品の中では、子供たちは鳥栖市岡寺古墳の馬や鶏の形象埴輪（鳥栖市教育委員会蔵）、野村昭嘉・池田龍雄の作品、岸天岳の『虫行列図』、『固城五廣大（コソノオグアンデ・タル）』（佐賀県立名護屋城博物館蔵）山内町鳥海（とのみ）地区に伝わる『八兵衛浮立面』などの人気が高く、特に水田淳子の彫刻『宝物は常に怪物が守る』の回りには熱心にのぞき込む姿が多く見られた。大人には「II 神さま・仏さまのかたち」のコーナーの大塚榛山『阿弥陀如来坐像』・『観音菩薩立像』、三浦子稜『摩利支天図』などが注目を集めていた。前掲の『虫行列図』は大人にも子供にも人気が高かった。

今回の展示会は、11,000人以上の人に観覧していた

だったが、中学生以下は約2,700人とほぼ1/4の割合である。子供向けの展示会としながらも、大人の数が圧倒的に多かった。

夏休み期間中に開催する常設特別展が定着しつつある今、「子供のため」の展示会から「子供も大人も楽しめる」展示会として、より一層の充実が求められているようでもある。

また、展示テーマの選択、キャプションやワークシートの内容、ワークショップのあり方等々、今後の検討課題や改善すべき点も多い。来年夏には、佐賀城本丸歴史館（仮称）もオープンする。夏休み期間中はますますにぎやかになるだろう。



2号展示室の展示風景とワークショップ

（学芸課 西田和己）



子供たちに人気のあった『雲の製造II』（左）と『覆面』（右）



レポート

「こども土曜クラブ」始まる！

今年度より、「こども土曜クラブ」を開設した。この催しは、平成15年5月から16年2月まで、毎月1回土曜日の10時から12時までの2時間、博物館・美術館ならではの小・中学生向け催しを行い、土曜日が完全に休みになった子どもたちに博物館・美術館にもっと親しんでもらおうとするものである。2年前から始めた「夏休みこどもミュージアム」が好評だったことから夏休みに限らず年間を通して親しんでもらおうと意図した企画である。

参加者募集にあたっては、最初の企画でもあり、定員40名の確保に正直なところ不安を覚えた。特に今の小学校高学年や中学生は土日も忙しい。果たして、どれほどの応募があるか。

ところが、あにはからんや、5月2日に募集を開始すると我々の心配を他所に、11日には40名の定員に達してしまっただけでなく、5月26日の締め切りを待たずにたちまち定員オーバーになり、急速、定員を50名に増やしたが、それでも30名以上の皆さんには不参加の通知を出さざるを得ない状況になってしまったのである。

その「こども土曜クラブ」の内容は別表のとおり10回である。さらに、千代田町の「おもしろ体験歴史塾」の子どもたちも参加して毎回盛会である。今回は第1回から夏休み中に開催された第4回までの子供たちの様子をレポートする。



荷物のエレベーターを体験

第1回目の「博物館・美術館ってどんなところ？」はふつう見られない博物館・美術館の裏側を探検した。参加者は千代田町の「おもしろ体験歴史塾」のメンバーも含め71名（保護者も含めると約90名）にもなり、展示室はもちろん収蔵庫なども子供たちであふれた。



鯨の門で説明を聞く

第2回目は「佐賀城本丸跡たんけん」だった。博物館・美術館の隣で建設中の佐賀城本丸歴史館（仮称）の建設現場を中心に探検しようというもので、国の重要文化財である鯨の門に残る佐賀の乱の弾痕などをクイズ形式でおもしろく学んだ跡、現在復元工事中の佐賀城本丸御殿の中まで入ることができた。

子供たちは、全員工事用のヘルメットをかぶり緊張して説明に耳を傾けたが、本物として復元される御殿を目の当たりにして「使われる木材はどれくらいか。」「畳の枚数は何枚か。」などの質問が飛び出した。「まるで時代劇に出てくる部屋のようでした」と感想を持った子供がいたように、長く忘れることのない思い出になったようである。



ヘルメットをかぶって説明を聞く

第3回目は、「ギャラリースケッチ」に挑戦した。美術館で開催中の「美術館はふしぎの国」の作品を参考に空想画にチャレンジするというもの。「美術館はふしぎの国」は子供たちが見て「何これ」「変・・・」「???・・・」と思う絵画、彫刻、お面、埴輪などが満載の展覧会であり、子供たちの創造力をおおいにかきたてたようだ。直接展示場の中で描くことができることもあり、わずか2時間ではあったが、作品が続々と完成した。さっと仕上げる子供もいれば時間ギリギリまでねばって描く子供と様々。それぞれの作品はそのまま会場の壁面に夏休みが終わるまで展示された。



描きあげた作品はそのまま展示される

第4回目は「土笛づくりに挑戦」を行った。弥生時代の土笛を実際に作って鳴らしてみようとチャレンジするもの。最初に説明を聞いてから作り始めたが、途中で割れたりしてうまく行く子は少ない。中には音を

出すときにまだ柔らかい粘土の吹き口にどうしても口をつけられない子供もいた。それでも学芸員のサポートを受けながらなんとか完成する。悪戦苦闘の2時間だったが、全員自分だけの土笛を新聞紙に包んで大事そうにもってかえた。



吹き口の形をつくるのがむずかしい

現在、第7回目まで終了したが、怪我もなく無事に進んでいる。これまで特に子供たちにとっては敷居の高かった博物館・美術館に、少しずつではあるが親しみを持ってきているのではないかと感じている。今年、始めたばかりで色々な課題が見えてきたが、残り3回を終了した段階で総括したい。

平成15年度子ども土曜クラブ実施内容

	日時	内 容
1	5月31日(土)	博物館・美術館ってどんなところ？
2	6月21日(土)	佐賀城本丸たんけん
3	7月26日(土)	ギャラリースケッチで空想画を描こう！
4	8月23日(土)	大昔の土笛をつくろう！
5	9月27日(土)	彫刻の森スタンプラリー
6	11月1日(土)	美術館の展覧会を楽しもう
7	11月22日(土)	佐賀県の自然とむかしを訪ねてみよう。県内バス見学
8	12月13日(土)	お堀の冬鳥たちと遊ぼう
9	1月24日(土)	むかしの道具—これなーに？
10	2月28日(土)	僕の生まれた頃！

※内容等は予定です。

(学芸課 家田淳一)

平成16年度の展示予定

■博物館常設特別展「肥前佐賀のものふ」(おしらせ)

平成16年1月30日(金)～2月29日(日)

会場：美術館2・3号展示室

古代より佐賀は、海外交流の玄関口として先進の制度や文化を受け入れ、特色ある歴史を築いてきました。中世から近世にかけて歴史の表舞台で政治・文化をリードし、海外との交流や対立の中で成長してきた肥前佐賀のものふを古文書、絵画、武具、出土遺物などの関係資料で追い、蒙古襲来から佐賀藩成立までのあゆみを御覧いただきます。

【観覧無料】

<展示構成>

- I 蒙古襲来と肥前武士
- II 松浦党と倭寇
- III 五州二島の太守龍造寺隆信
- IV 文禄・慶長の役と鍋島直茂
- V 葉隠武士の装い

<展示解説>

- 1月31日(土)、2月14日(土)、
2月28日(土)いずれも午後2時から

■これから始まる展覧会

博物館・美術館主催の展覧会

美術館常設展 (美術館2号または3号展示室、無料)

- | | |
|-------------------|--------------------|
| 1月2日(金)～1月25日(日) | 一郷土の画家たち一佐賀の日本画 |
| 3月5日(金)～4月18日(日) | 一郷土の画家たち一山口亮一展 |
| 3月23日(火)～4月18日(日) | 一郷土の画家たち一春の美術館2004 |

博物館常設特別展 (美術館2・3号展示室、無料)

- 1月30日(金)～2月29日(日) 肥前佐賀のものふ

博物館テーマ展示 (博物館3号展示室、無料)

- | | |
|--------------------|---------------|
| 11月26日(水)～1月18日(日) | 肥前の古画を歩く<歴史> |
| 3月2日(火)～4月18日(日) | 佐賀のブランド民具<民俗> |



紺糸威桶側二枚胴具足 (伝龍造寺隆信所用)
佐賀県立博物館蔵